

---

# イヤホン

てつつん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イヤホン

### 【Zコード】

N4243H

### 【作者名】

てつん

### 【あらすじ】

日常ある不思議な事が起きた。良く考へるとそれは何気ない恋の始まりかもしね。

今日はいつもより寒い朝だつた。

だからと言つて哲也は、朝寝坊する事は滅多に無い事だが、今日に限つて寝坊してしまつた。

目が覚めて、呆然と目覚まし時計を見つめるや、急いで出かける支度をし始めるのだつた。

哲也は慌ててドアの鍵を締めると、直ぐに走り出した。まだ外は寒かつた。

哲也は走りながら神に祈つた。

「いつものバスに間に合いますように…」

そして、息を切らしながらバス停に着いた哲也の前には、神様はいなかつたのである。

「やつぱり、駄目だつたか。」

哲也が道路に沿つて視線を移していくと、そこにはいつものバスが遠ざかつて行く光景が目に入つてきたのだつた。

「いつもは、20分も遅れて来るくせに、今日に限つて時間通りに来るんだよな。だから嫌だよ。バスは。」

ぶつぶつと文句を言いながら、息が落ち着き始めた頃に次のバスが来た。

てちやがそのバスに乗ると

「あれっ、バスが空いている。」

「一本違うだけで、こんなに違うものなのかな。」

そう、哲也がいつも乗つているバスは、ひどいもんだつた。

化粧して、おしゃべりばかりしている女子高生や幼稚園に行く子供の声、サラリーマンのビキツイ香水の匂い。

人ごみが苦手な哲也にとっては、まるで地獄であつた。

しかし、その地獄は3つ後の停留所が過ぎると天国に変わる、だから我慢して毎日乗つっているのだ。

バスが空くと哲也は、いつもの後ろから3番目の左窓側に席に座つて、他の人の話し声が聞こえないように iPodを大音量で聞きながら寝るのが習慣だつた。

この日も、丁度その席が空いていたので、いつものように iPodを取り出し耳にあてながらその席に座ると直ぐに眠りについていった。

しばらくして、哲也はふと右肩が急に重くなつてゐる事に気付いた。てちやは、右目を少し開け自分の右肩の方に視線をやると、驚いた事にそこには人間の頭が目の前に現れた。

てちやは、びっくりして両目を開けると、姿勢を正そうと動いた瞬間その頭が動着始めた

哲也は、何故か動くのを辞めた。

だが、哲也は決して気長な性格ではない。

自分のお気に入りの時間を邪魔された事で、幾分腹が立つていた事もあって、その頭の持ち主を起こさうと、その人の肩に手を伸ばした。

その瞬間、また目の前の頭が動き、哲也はドキッとした。

そこには、気持良さそうに寝ている若い女性が、とても幸せそうな顔をして寝ている顔があつたのだ。

その顔を見て、てちやは手を引っ込めるしかなかつた。

そして仕方なさそうに

「まあ、いいか」

と、その姿勢で再び眠りについていった。

バスが終点近くになると哲也は目を覚ます癖がついていた。

哲也が目を覚ますと、いつものようにバスは終点に着く手前を走つているところだった。

そして期待していた状況とは裏腹に変わらない右肩の状況に気付く。相変わらず、自分の右肩は彼女の枕になつていた。

そのまま、バスが終点に着くと周囲の人達が席を立ちバスを降り始めた。

それにもかかわらず、横に目をやると隣の女性はまだ幸せな顔をしている。

哲也はとうとうしぐれを切らし、女性の肩を軽く叩いてみた。

その途端、彼女はスイッチが入ったロボットの様に突然目を開け、勢い良く頭を上げたのだった。

徹夜はどの動作にびっくりして、しばらく口が開いたままだった。しかし、女性はバスの中を見渡すと、今の状況を把握しようと一生懸命に見えた。

それを見て、正気に戻った哲也が

「着きましたよ」

と軽く囁くと、彼女は自分を見るや

「はつはい。」

と言つて席を立ち上がるうとした瞬間、奇跡が起きた。

哲也と女性の耳が同時に引っ張られたのだった。

同時に二人が

「痛つ！」

と叫んで、自分の耳に手をやつた。

哲也は耳から外れてイヤホンを見て、その原因が分かつた。

そう、哲也が手にしているイヤホンは、自分のものではなかつたのだ。

そして女性が持つているイヤホンもそうであった。

簡単に言うと彼女のイヤホンが自分の耳に、自分のイヤホンが彼女の耳に入っていたのだ。

その状況に、我を忘れ二人が同時に

「じつ、ごめんなさい。」

と頭を下げる誤つた。

そして顔を上げると、イヤホンを交換しながら顔を真っ赤にしてお

互い笑っていたのだつた。

それもつかの間、バスのスピーカーから

「すいません、終点ですが」

と言ひ運転手の声がした。

二人は、慌てて早足でバスの降り口へ向かう事に。

そしてバスを降りると、一人は何事もなかつた様に正反対の方向へ歩きだした。

哲也は駅に向かいながら思つた。

「どうして、あの時女性を起こさなかつたのだろう?..」

「どうして、イヤホンを入れ替わつてたんだろう?..」

「でも、右左違う音楽を聴いてたら普通どっちかが起きるだろ?..」

哲也はその瞬間、足を止めた。

「もしかして・・・まさかな・・・嘘だろ?..」

急に足を止めて、哲也は後ろを振り返つた。

そこには、いつもと変わらず人ごみでごつたがえしている駅前の風景があつた。

その時、哲也は思つた。

「明日も寝坊しようかな。」

・・・・・終わり・・・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4243h/>

---

イヤホン

2010年10月11日03時53分発行